気に喰わない人

春桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
気に喰わない人

【Ｎコード】
Ｎ６９９８Ｌ

【作者名】
春桜

【あらすじ】
沖田の姉、ミツ。薄桜鬼に出てこないので書きました。

複雑（前書き）

銀魂のミツバ編を見て感動したので薄桜鬼にまぜました。パクリだらけです。

複雑

ある日、私、雪村千鶴は屯所を綺麗にしていた。朝一番の掃除はとても気持ちいいものだ。
「終わった？」
「がっ？！」
思わず転んでしまった。
「お、沖田さん・・・・ビックリしましたよ。」
「あはは。そんなビックリしないでよ。千鶴ちゃん。」
いつもの笑顔で言う。しかし今日はいつもと少し違う・・・。機嫌がいいように思う。
「なにかあったんですか？」
「ん？どうして？」
「いつもより機嫌がいいと思って・・・。」
「ふうん。聞きたい？」
「えっまぁ・・・。」
「今日ね。僕の姉上が屯所にくるんだよ。」
沖田さんのお姉さん・・・・。前に近藤さんと土方さんが言っていた人だ。たしかミツさん。近藤さんも土方さんもどこかミツさんを恐れるような言い方だったな。
「どうしてですか？」
「わからないけど、僕は久しぶりに姉上の顔が見れるほうが嬉しいから。」
「そうですよね。よかったですね。」
「うん。」

「今日はミツさんが来る日であったな。総司。」
近藤さんが言う。

「はい。」
その言葉に土方さんは渋い顔をして広間をさっさと出て行った。
「土方さん、どうしたんですか？」
「知らないよ。全くあの人は・・・。」
沖田さんは苦笑する。
「鬼副長でもミツさんは怖いのかなぁ～」
平助君が面白く言った。
「だろうな。平助は会ったことねぇからそんなこと言えるんだ。」
「そうそう。」
原田さんの言葉に永倉さんも同意した。
ミツさん・・・ 土方さんも苦手なくらいの怖い人なのかな？

その日の昼時、幹部の人たちは広間に集められた。やがて近藤さんが扉を開ける。
「ささ、ミツさん、どうぞ。」
「ありがとうございます。近藤さん。」
近藤さんが先に通した女の人が姿を見せる。顔立ちは沖田さんに似てとても整い、すごく綺麗な人だ。おっとりした目で優しく微笑むその姿はとても美しい。
「姉上！」
沖田さんはミツさんに駆け寄った。
「久しぶりね。総ちゃん。元気そうね。」
ミツさんは沖田さんの病気のことは知らないのだろうか。いや言えるはずがいない。
「みんなもお久しぶりです。総ちゃんと仲良くしてくださってありがとう。」
「姉上！そんなことはいいんですよ。ささ、京の観光でもいかがですか？」
「おい！総司！」

近藤さんの言葉も聞かずに沖田さんはミツさんを連れ出て行ってしまった。
「全然怖そうに見えませんけど・・・。」
近藤さん、原田さん、永倉さんは苦笑するだけで答えてくれない。

そういえば土方さんだけ姿を見せなかった。私は土方さんを捜す。
やがて見つけると彼は中庭に一人たたずんでいる。
「ひ、土方さん。」
「何だ？」
「あのミツさんは・・・。」
「ああ、いいんだよ。俺ァ、あの人は俺の顔もみたくねぇだろうよ。」
「え？どうしてですか？」
「・・・・。おめぇには関係ねぇ。」
そういって土方さんは屯所内に消えていった。

ミツさんと新選組の人たちになにがあったのだろう？

複雑（後書き）

色々キャラ崩壊してたらすみません。

生きる月

その日の夕刻、沖田さんとミツさんは帰ってきた。

「あっ、お帰りなさい。お二人とも。」

門を掃除していた私は二人に声をかけた。

「うん。ただいま。千鶴ちゃん。」

沖田さんはものすごく上機嫌だった。

「あなたが、雪村　千鶴ちゃん？」

綺麗な顔のミツさんが首をかしげて私の顔をのぞきこむ。

「はっ、はい！」

「いつも総ちゃんが迷惑かけてごめんなさいね。」

「そんな！迷惑だなんて・・・。」

ちょっといじわるだけど・・・。

沖田さんは少し笑って背を向けて屯所に入っていった。

「総ちゃんは・・・あなたのことを楽しそうに私に話してくれたわ。・・・ありがとう。」

「いえっ！私は何も・・沖田さんにはいつもお世話になってて・・・お礼を言うのは私のほうです。」

「・・・・あの子。病気なんでしょう？」

「え・・・。」

私は言葉がでなかった。沖田さんの病気は誰にも言っていない。どうして・・・。

「歳三さんが手紙をくれたの。あの人。誰より心配性だから・・・。でもあの子私がいたらはしゃいで病気のことなんか何もないって思えてしまうの。困った子よね・・・。」

「・・・・・。」

「千鶴ちゃん。あなたならあの子に無理させないことできるよね？

私には何もできないから・・・。」
ミツさんの横顔がすごく悲しかった。沖田さんの病気・・・でも沖田さんは闘う。刀を持って。それでもむしばむ体・・・。私はミツさんにできないことをするんだ。

「さっ、姉上。僕の横に座ってください。」
「ふふっ。ありがとうね。総ちゃん。」
沖田さんがうながすとミツさんは優雅に座った。
「何日いるんですか？」
沖田さんが聞く。
「明日には帰るわ。旦那様に無理を言ったもの。仕方ないわ。江戸まで遠いしね。」
「でも長旅で疲れているでしょう。もう少し休んでは・・・。」
「いいえ。ありがとうございます。近藤さん。でも明日帰ります。」
この会話を見てなんとなくミツさんがとても頑固な女性なのだろうと思った。
「それにしても久しぶりね～左之さんに新八さん。」
「そうだよな！ミツさん。また綺麗になったなぁ～。」
「あら、お世辞がうまくなったわね～新八さん。でも・・・顔がうそ言ってよ？本当に思ってないなら言わないことね。昔と変わってないって思ってるんでしょう？」
「うっ！」
永倉さんは苦くなりひきつる。
「まぁまぁ。ミツさん。変わってないのはいいことじゃねぇか。昔のままで綺麗ってことだ。なぁ新八！」
「お、おう！」
原田さんの助け舟に永倉さんは乗っかった。
「ふふ。あなたたちも変わってなくて昔に戻った気分。」

ミツさんは嬉しそうに笑った。
「・・・・そうもいかないか・・・・。」
何がそうもいかないのか私にはわからなかった。

「ごちそうさま。ねぇ。近藤さん？」
「何ですか？ミツさん。」
「私、千鶴ちゃんと一緒の部屋で寝てもよろしいですか？」
私はビックリしたけど、ミツさんは私が女とわかっているし、別に断る理由もないし・・・・。
「雪村君がいいならいいよ。」
「いい？」
「は、はい！」

その後・・・・。ミツさんは沖田さんとずっと雑談していた。こんな日ぐらいしか沖田さんが笑って姉と話せる日がないと思うと私まで寂しくなった。

「あれ？土方さん・・・・。」
縁側でいる土方さんは髪をおろして月に照らされてとても美しかった。
「なんだよ。もう寝る時間だろうが。」
「いえ。あの・・・・。土方さんの姿が見えたので・・・・。」
「そうか。座れよ。」
私は土方さんの横に座った。どうしても聞きたかった。
「沖田さんの病気のことを・・・・土方さんは・・・・。」
「知ってるよ。だからあの人を呼んだ。」

「・・・・。」
「総司は、俺がいくら言っても笑いで返してまたいたずらしてどうしようもねぇ奴だ。俺はできねぇよ。あいつをここから追い出すなんて・・・・。」
「追い出すって・・・。」
「俺は病気なんかであいつに死んで欲しくねぇ。あの姉弟は俺に近藤さんにとっても特別だからな。」
土方さんは沖田さんのことを本当に大切に思っているんだ・・・。
「私も・・・ 沖田さんに病気死んで欲しくないです。ミツさんもそう思ってると思います。でもやっぱり決めるのは沖田さんですよね。自分の生きる道を・・・。」
私を見て土方さんは少し笑った。
「もう寝ろ。子供は寝る時間だ。」
「はい。お休みなさい・・・。」

「歳三さん・・・。」
「・・・・・ 俺に声をかけるなんてな。思わなかったよ。」
そういうとミツは土方の横に座った。

怒りの涙（前書き）

めちゃくちゃ空いてしまいました・・・このお話はすぐに終わると思います。みつさんは新選組～武士たち～にも出てるく予定ですのでよければ読んでくださいね。

怒りの涙

みつは薄く笑うと土方を優しく見つめた。
「俺に話しかけるなんてな。思わなかったよ。」
「駄目ですか？お久しぶりに話しても。」
「いいや・・・。」
土方は目を伏せた。
「私はね。怒ってるんです。あなた方に。」
「・・・・。」
「だって総ちゃんをあれほど頼むと言っておいてあんなになるまで闘わせるのですから。」
「すまない。」
土方は呟くように謝った。ミツは空を見上げた。
「でも。あんなに辛そうな総ちゃんを・・・・。見るのは初めてで。止めることも私にはできないと思うと誰も責められません。」
ミツは続ける。
「私はあの子に何もしてやれないからあなた方を責める資格なんてないんです。だけどお願いがあります。」
土方は目を細くする。
「あの子の好きなように生きさせてあげてください。あなたはあの子を見届けてはくれないでしょうか。私はあの子に剣をふるうなということはできなんです。そして近藤さんにも歳三さんにも言ってほしくない。お願いします。」
ミツは頭を下げた。土方は頷いた。
「顔をあげてくれ。ミツさん。」

「・・・・。」
ミツは顔を上げた。
「俺だって・・・・。あいつはどうしようもねぇ奴だが死ねせたくねぇよ。だが剣をふるうななんて死んでもいえねぇ。俺たちは武士だからな。」
「武士・・・。」
「あんたは・・・どうなんだ？旦那とは。」
「ふふ。旦那様は良い方ですよ。お優しく、強い方です。あなたとは正反対の性格ですが。」
土方は目を一瞬見開いた。
「私は後悔しておりませんよ。お家のためですもの。」
彼女の優しい笑みはどこか悲しかった。
「私は総ちゃんを止められません。ごめんなさい。歳三さん。」
「・・・・・・ああ。」
土方はやっとの思いで呟いた。そしてミツは去って行った。

（やっぱり・・・・。）
二人の会話を聞いていた沖田はこぶしを強く握った。
（気に喰わない・・。）
あの人は姉上を泣かせることしかできないのか。
何故、陰で僕を心配しているんだ。
土方さんに心配されるなら死んだほうがいい。
何故・・・・。
姉上を傷つけることしかできないんだ！
姉上の気持ちを知っていながら！
姉上はいつでも優しくて・・・。僕のことを思ってくれてた。
なのに！あの人が彼女を傷つけていった。

わかってる。僕は闘うことしかできない。
たとえ姉上に止められたって・・・・。
わかってるのなら。何故彼女を・・・・・。

「くそっ！」
いつの間にか沖田は拳を壁に打ち付けていた。

ミツは千鶴の部屋に行くとき、ある人物と出会った。幾度か見たことのある男だ。
「あなた・・・たしか・・。」
斎藤一。試衛館道場に幾度も顔を見せ、新選組の一員の彼。ミツは総司の姉として何度も試衛館に行っていて彼を見たことがあった。
彼は物静かであまり話さないので会話した記憶は皆無だった。
「お久しぶりです。」
彼は頭を下げる。
「あの時、総ちゃんに怪我を負わせた人よね？元気そうですね。」
「・・・・・・。」
会話はそこで途切れてしまった。ミツは少し困った顔をした。
「あなたは総ちゃんをどう思う？」
「どう？」
「・・・確か噂では沖田総司は猛者の剣。斎藤一は無敵の剣・・・
だったかな。私が言いたいのは総ちゃんはちゃんとみんなとうまく

やっているのかなってこと。総ちゃんは優しくて強い子だけれど・・・。人を斬ることを躊躇しないでしょ。だからそれが組織に迷惑をかけているのかもしれないと思って。仲間・・・斎藤さんみたいな強い剣士。あの子きっと殺してみたいと思っているだろうから。」
「問題ありません。総司は俺たちを殺したりましせん。裏切らない限り。総司は変わらないと思います。」
淡々と言った斎藤にミツは笑った。
「ありがとう。斎藤さん。」
それきり二人が会話することはなかった。

私は布団を敷いて眠る所だった。
「千鶴ちゃん。」
「は・・・はい！み、ミツさん！」
現れたのは沖田さんの実姉、沖田ミツさんだった。彼女は綺麗な人でいい香りがした。彼女は部屋に入ってきて布団にもぐりこんだ。
「今日は一緒に寝てもいいですか？」
「も、もちろんです！」
彼女が少しだけ目を見せて言ったので思わず顔を赤らめてしまう。
「ねぇ。千鶴ちゃん。」

「はい。」
一緒の布団に寝ころびながらミツさんは天井を向いて言った。
「総ちゃんのこと・・どう思う？」
「え？どうって・・・・。」
「好きか、嫌いかってことよ。」
「ええ！？」
私はすぐに答えられなかった。本当の気持ちは恥ずかしかった。
「どうなの？好き？嫌い？」
ミツさんはこちらを向いて私の顔をのぞきこむ。私は答えるしかなかった。
「好きです・・・。」
「そうだと思った。」
「わ、私、わかりやすかったですか？」
「ううん。女の私だから気づくのかな。総ちゃんはあんまりそういうのに興味がないから気づいてないわよ。」
「そうですか・・・・。」
「そんなあなたに頼みがあるの。」
「え？」
「総ちゃんのそばにいてやって。あなただけは総ちゃんを支えてあげて？」
ミツさんは真剣な顔をしている。
「あなたが本当に総ちゃんのことを思っているならあの子を支えてほしい。私は何もできないから。」
ミツさんの顔はとても切なくて。私は何も言えなくなってしまう。

私は彼のために何かしてやれるだろうか？

私は彼を愛してもいいのだろうか？

それだけが私の頭の中をぐるぐると駆け巡っていた。

魂の嘔（前書き）

あいてました。完結？グダグダ。当初書きたかったのがまとまってません。
とりあえず土方さんはまだミツさんのことが気になって感じかな。
ミツさんもそうです。だから沖田さんが気に食わないのです。

翌日、ミツさんはせっせと起きて、もう旅の準備を終えていた。
私はその日、あまり寝つけが悪くて寝坊してしまった。
「みみみミツさん！！！す、すみません！！！」
ミツさんは千鶴に微笑んだ。
「いいえ。私もゆっくり眠らせてもらいましたから。千鶴ちゃん。そんなに焦らないで。」
私はもうパニくってよくわからない奇声を発していた。私はミツさんの笑顔が怖くはないけれど焦りをさらに焦らしていた。ミツさんはもう完璧に支度をしているのに自分ときたら眠っていたのだ。
「ひ、土方さんに・・・・殺されるっ！！！」
別に隊士でもないが早起きする私は土方によく褒められていたものだった。単純に嬉しかった私は鬼の副長に怒られると思い込んでいた。
「あら。歳三さんはこんなに可愛い千鶴ちゃんを殺してしまうの？」
ミツさんは首をかしげて聞いた。その顔も声も美しくて私はみとれてしまった。ミツさんは怒っていたのかもしれない。土方さんとミツさんにはどんな関係があるのだろう。
私はミツさんの言葉を返すのが遅れた。
「私は・・・。ミツさんもご存じかもしれませんが・・・。」
「知らないの。」
「え？」
「私は総ちゃんの姉というだけしかここに関われないの。だから私

はあなたがここに何故いるのかよくわかってないの。」
「じゃあ・・・どうして・・・？」
「私はあなたを殺す力もあなたを罵ることもできないんですよ。」
ミツさんは面白そうに言う。その顔は弟さんに似ている気がした。
「私は女ですから。あなたは女の子ですけどここにいる。あなたが生きているのはきっとみんなのためでしょう？私はそんなことができはしないから・・・。千鶴ちゃん。」
「はい・・・。」
「あなたはあなたの思うとおりに生きればいいから。逃げ出したいときは逃げ出したらいいし、泣きたいときは泣けばいいの。我慢しないで。辛い思いも全部、あなたが抱え込まなくていいの。」
「ミツさん・・・・。」
ミツさんの言葉が胸に響いて消えていく。ミツさんは私よりも皆といたいんだ。けれどいれないことを知っているから私が何者かわからなくても受け入れてくれるのだろうか。
「では朝ごはんをいただきたいわね。行きましょう？」
私は涙をこらえてミツさんの後に続いた。

沖田さんはいつもと変わらず見えた。けれど近藤さんと土方さんは言っていた。
『総司は・・・。いつも無理してんな。気まぐれのくせに自分をさ

らけ出さない。いつも感情を殺してる・・。『
『総司をこんな風にしてしまったのは俺たちだな・・・。』

二人の言っていることはわかった。
きっと沖田さんはミツさんと別れたくないんだ。
沖田さんはもう両親も二人とも亡くなっていて試衛館に来るまでは
ミツさんが母のような存在だったのだろう。
でも沖田さんはいつもと変わらぬ表情をしているから。
誰も心配させないように。
それは私にとって悲しいのに。

「では帰ります。」
屯所の玄関に幹部はミツさんを見送る。
「総ちゃんに何も言えませんでした。ごめんなさい。歳三さん。」
「・・・・・。」
誰も何も言えなかった。沖田さんは真顔で前を見据えているし、永倉さんや原田さんはよくわかっていなかった。土方さんだけは薄く笑った。
「俺も正直じゃねぇからあんたは俺の気持ちがわかってくれるだろ

う？」
「ええ。私も同じ気持ちですから。」
何が同じ気持ちなんだろう。私にはわからないことばかりだ。
「ありがとう。」
土方さんは頭を下げて、言った。
「私こそ。総ちゃん。」
ミツさんは沖田さんに優しく微笑む。
「姉う・・・え・・・。」
ミツさんは沖田さんを優しく抱きしめていた。
「総ちゃん・・・・。ちゃんとご飯食べて大きくなって・・・・。みんなにいじめられないようにね。」
「大丈夫です・・・・。ていうかこれ以上大きくなれません。いじめられるのは心配しないです。」
この時、私はいじめるなんてとんでもないと思っていたと思う。
「ね。約束して。また会って私に総ちゃんの笑顔を見せてくれるって。」
その時、時が止まるかのように沖田さんとミツさんは微笑みあう。
「はい。」
沖田さんの声が消えるとミツさんはすっと離れ、背を向ける。
「では、みなさん。また会える日を。」
最後に私に微笑んだあの顔を。私は生涯忘れることはない。

「千鶴？」
総司さんは私を呼んでいる。
なんて長い夢だったのだろう。
私はいろいろあってまだ総司さんのそばにいる。
今は夫婦となって平和に暮らしている。
ミツさんとは離れ離れ。それでも彼は悲しくないという。
「総司さん。私は・・・・。自由なのでしょうか。」
寝ころんだまま私は唐突に聞いていた。
「突然、何言うの？」
「私はいいえ。人は何かに縛られているような気がします。新選組という組織が何かを縛っていたように。」
「千鶴。それは違うよ。新選組は縛るものじゃない。」
「・・・・。」
「縛るものはあるよ。君を言うとおり。けれど僕が思っていたのは魂・・・かな。」
「魂？」
「人と人がつながって一つになればどんなこともできると思わない？って今は思うけど昔は自己中心的に思ってたからね・・・。」
総司さんはおかしそうに言う。
「人と人を繋ぐ・・・・。縛るのではなく。」

私は何に縛られているのだろう。
運命？環境？人？
違う。自分の思いだ。
私は変われば変われる。

彼は生きている。
私も生きている。
微笑みを消すことなく・・・・・。

「総司さん。ミツさんに・・・・会いに行きませんか？」
「うん・・・。」

約束を果たそう。
私の笑顔と総司さんの笑顔を。
私たちはあなたの笑顔も見たいのです。

ありがとうございます。
私に勇気をくれて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6998l/

気に喰わない人

2010年12月19日12時48分発行